

# 令和4年度 病害虫発生予察 注意報 第3号

令和4年8月1日  
大分県農林水産研究指導センター  
農業研究部

- 1 対象病害虫 うどんこ病
- 2 対象作物 ナス科作物（ピーマン、トマト）
- 3 対象地域 県内全域
- 4 発生面積 多い
- 5 発生量 やや多い

## 6 発表の根拠

(1) 7月中旬の巡回調査においてピーマンでは、発生圃場率、発病度ともに平年より高かった。トマトでは発生圃場率は高く、発病葉率は平年並であった。

ピーマン：

発生圃場率：50.0%（平年：22.2%、前年：33.3%）  
平均発病度：3.8（平年：1.1、前年：0.9）

トマト：

発生圃場率：40.0%（平年：18.8%、前年40.0%）  
平均発病葉率：2.9%（平年：2.8%、前年4.0%）

(2) 福岡管区气象台が7月21日に発表した1か月予報では、向こう1か月の天候は平年に比べ晴れの日が多く、高温少雨が予測されており、本病に好適な気象条件が続くと考えられる。

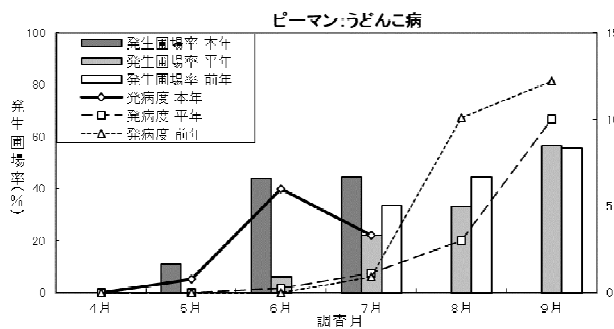


図1 ピーマンにおけるうどんこ病発生状況

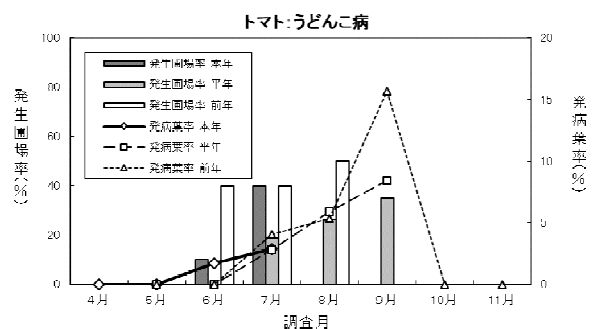


図2 トマトにおけるうどんこ病発生状況

## 7 防除対策

- (1) 本病は、樹勢低下により発病が助長されるため、適切な肥培および灌水管理に務めるとともに、適期収穫を徹底する。
- (2) 圃場内の観察を徹底するなど、本病の早期発見に努め、予防散布や初期散布に重点を置くとともに、葉裏まで十分薬剤がかかるよう散布圧などに留意して防除を行う。
- (3) 本病は、発病後の進展が早く、防除遅れが生じやすいため、発病初期から治療効果の高い薬剤を中心に散布する。
- (4) ピーマンにおいては、硫黄粉剤の株間散布により、安定した防除効果が得られる。ただし、本剤は、硫黄ガスが充満することで効果を発揮するため、3 mや6 m間口ハウスのような圃場内の密閉性が必要である。また、治療効果を有しないため、発病前からの散布が肝要である。
- (5) 薬剤抵抗性発達を防ぐため、同一系統薬剤の連続使用は避け、ローテーション防除を心掛ける。防除に使用する薬剤は、大分県農林水産研究指導センター病害虫対策チームホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」(<http://www.jppn.ne.jp/oita/>)の「ピーマン」「トマト」の項を参照する。なお、薬剤によっては指針の更新日以降に登録内容が変更されている場合があるため、容器のラベルに記載されている使用時期、使用回数等を遵守し使用する。

病害虫対策チームホームページ

<http://www.jppn.ne.jp/oita/>

